態学」を解明するのに有用なモダリティーであるが，筆者らは3次元心エコーを用いて形態学的な心臓の動きを詳細に観察し，左心室の心尖部方向への僧帽弁および大動脈弁の動き（弁輪の垂直移動 annular excursion）が左室の血液流入効率を増大することに役立っていることを発見した．オリジナリティーの高い研究内容であり，心臓弁膜症分野における国際誌（Journal of Heart Valve Disease 2010; 19: 244-248）に掲載された．この研究が評価され筆者はドイツにおける著名な心臓病治療施設に招聘もされている．学位論文として相応しいと思われる．

14

氏　　名	平（ヒラ）　井（イ）　栄（エイ）　一（イチ）
学位の種類	博士（医学）
学位授与の番号	乙第2638号
学位授与の日付	平成22年7月16日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当（博士の学位論文提出者）
学位論文題目	**Assessment of perioperative nutrional management after total gastrectomy : Comparison between total pareteral nutrition and peripheral parenteral nutrition** **（胃全摘術術後の栄養管理についての検討―TPN と PPN を比較して―）**
主論文公表誌	東京女子医科大学雑誌　第79巻　第8号　348-354頁　2009年
論文審査委員	（主査）教授　亀岡　信悟 （副査）教授　山本　雅一，江崎　太一

論文内容の要旨

〔目的〕

完全静脈栄養（total parenteral nutrition：TPN）の登場により消化器外科手術の術後合併症は減少したと言われる．胃全摘術においても術後の栄養管理は多くの施設で TPN を行っているのが現状であるが TPN に関連した合併症も無視できる頻度ではない．近年，吻合がより安全に行われるようになり術後の絶食期間も短縮される傾向にある．TPN は胃全摘術術後に必要な栄養管理法であるのか．今回，術後栄養管理を TPN で行った群と末梢静脈栄養法（peripheral parenteral nutrition：PPN）で行った群を retrospective に比較，検討した．

〔対象および方法〕

2003年12月～2006年2月までに胃癌，悪性リンパ腫に対して胃全摘術（他臓器合併切除術，残胃全摘術を含む）を施行し術後 PPN で管理した41例とそれ以前の TPN で管理した41例を対象とし，①周術期の栄養状態の変化について，②術後の感染症合併症の頻度，内容について比較，検討した．

〔結果〕

①周術期の栄養状態の変化：体重，総タンパク（TP）値については両群間に有意差はなかった．アルブミン値については第14病日の比較で PPN 群が TPN 群に較べ有意に高値だった．一方，末梢血リンパ球数では，第14病日の比較で TPN 群が PPN 群に較べ有意に多かった．

②術後の感染性合併症：術後の発熱症例，診断可能であった感染症は有意差はないが TPN 群で多かった．白血球数の変化は両群で差がなかった．CRP 値は第3病日のみ TPN 群で有意に高値だった．血糖値は第3病日，第7病日で TPN 群が有意に高値だった．

〔考察〕

結果より胃全摘術の術後栄養管理としての TPN の有用性は認められなかった．術前に栄養障害がなく術後に重大な合併症をきたさない症例についての栄養管理は経済性，利便性，安全性なども考慮し PPN が基本であると考えられた．

〔結論〕

合併症のない症例の胃全摘術周術期の栄養管理はPPNが基本であると考えられた.

論 文 審 査 の 要 旨

〔目的〕完全静脈栄養（total parenteral nutrition：TPN）の登場により消化器外科手術成績は向上した．胃全摘術においても術後の栄養管理はTPNで行われているが，TPNに関連した合併症も無視できる頻度ではない．一方，近年吻合法の安全性も増し，術後の絶食期間も短縮され，TPNの見直しの時期に来ている．この研究では術後管理をTPNで行った群と末梢静脈栄養法（peripheral parenteral nutrition：PPN）で行った群をretrospectiveに比較検討した.〔対象および方法〕胃癌，胃悪性リンパ腫に対して胃全摘術を施行し，術後PPNおよびTPNで管理した各々41例を対象とし，①周術期の栄養状態，②術後感染性合併症の頻度内容について検討した.〔結果〕①周術期の栄養状態：体重，総タンパク（TP）値は両群間に差はなかった．栄養指標としての末梢血リンパ球数はTPN群が高値を示したのみで，アルブミン値はPPN群が高値だった.②術後感染性合併症：術後の発熱症例，感染症例数に有意差はなかったが，TPN群の方が多かった．白血球数の変化は両群間に差はなく第3病日目のCRP値はTPN群で有意に高かった.〔考察・結語〕以上の結果より，術後の栄養管理としてのTPNの有用性は認められなかった．合併症のない症例の胃全摘術周術期における栄養管理はPPNが基本であると考えられた.

以上，この論文は基礎的，臨床的に価値ある論文である.

15

氏　　名	青木明子（アオキ アキコ）
学位の種類	博士（医学）
学位授与の番号	乙第2639号
学位授与の日付	平成22年9月17日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当（博士の学位論文提出者）
学位論文題目	**Associations between vascular calcification, arterial stiffness and bone mineral density in chronic hemodialysis patients** **（維持血液透析患者における血管石灰化と動脈壁の硬化，骨密度の関係）**
主論文公表誌	Geriatrics Gerontology International　第9巻　第3号　246-252頁　2009年
論文審査委員	（主査）教授　新田　孝作 （副査）教授　田邉　一成，泉二登志子

論 文 内 容 の 要 旨

〔目的〕

維持透析患者における心血管病変の危険因子として，血管石灰化が注目されている．また，骨密度は血管石灰化と動脈壁の硬化に逆相関することが報告されている．本研究の目的は，透析患者における大動脈石灰化と動脈硬化および骨密度の関連性について検討することである.

〔対象および方法〕

外来通院中の維持透析患者のうち，無作為抽出を行い，本研究に同意した83（男性70, 女性13）名を対象とした.

腹部CTスキャンにより，大動脈石灰化指数（ACI）を測定した．脳波伝播速度（PWV）は容積脈波法で動脈壁の硬化を評価し，骨塩定量はdigital image processing（DIP）法を用いて測定した.

〔結果〕

単回帰分析を行い，ACIは年齢（$r=0.586$, $p<0.0001$），透析期間（$r=0.47$, $p=0.002$），脈圧（$r=0.311$, $p=0.004$），